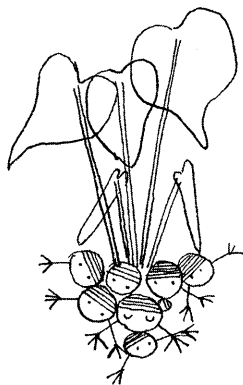


## ある新聞記事から

松井 とし



しばらく前の事になるが、新聞を読んでいた私の目に「0歳児から4歳 乳児院・養護施設一貫で」という見出しが飛び込んで来た。書かれていた内容は、「広島市のある施設で、乳児院と養護施設の養育環境を全面的に見直し、乳幼児が一緒に暮らせる乳幼児ホームを作った。小グループ制にして、国の定めた最低基準を上回る数の職員を配置し、一人の子どもをずっと同じ職員が担当する持ち上がり制を採用したところ、言葉をはじめとして、子どもたちの心身の発達が向上した」というものであった。

この記事を読んだ時にとっさに思い出したのは、八年程前に朝日新聞の「街」で紹介されたケイ君のことであった。

『ケイ君の唇が震えている。もうすぐ三つ。大粒の涙があふれてくるけれど、ケイ君は

大声では泣かないんだ』という書き出しで、ケイ君が二年半過ぎした乳児院を出て、別の養護施設へ移らなければならない日の、お別れのようすが述べられてあったのだった。

『両親はケイ君が生まれてすぐ離婚した。乳児院に来た時のケイ君はほとんどしゃべらないし、保母さんが笑いかけても反応せず「ポヨン」というあだ名をもらった。そんなケイ君に保母さんたちは「お泊まりいく？」と言っは、よく自宅に連れて帰ったという。規則にはないお泊まりを重ねるにつれて、ケイ君の表情が豊かになり、保育の記録には「明るい笑顔」「友だちと張り合っておしゃべりしている」と書かれるようになった。

お別れの日、この日のために保母さんたちがポケットマネーで買ってあげた、ジーンズのつなぎに赤い靴下、若草色の靴、そして腕にはコアラのぬいぐるみを抱いて、鈴なりの見送りの子どもたちや、保母さんに小さな手で「バイバイ」をしてケイ君は出ていった』とあった。(街 朝日新聞社刊 一九八五年より)

一人一人の子どもの主体性が何より大切にされ、発達観も変わってきている昨今。法のもとに、二歳前後で施設を変わり、環境の激変を体験しなければならない乳幼児の心が大切に考えられるようになった、というこの記事は、近ごろとてもうれしいニュースだった。

(元・幼稚園教諭)